

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	河合 朝香	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	青年期における社会的自己制御モデルの検討 —メンタライゼーションの媒介効果の探索的研究—
------	---

本文概要

【問題意識と目的】青年期の対人関係において重要な社会的自己制御は、従来の先行研究において、その発達の基盤に幼児期や児童期の母親の養育態度が影響を与えていると考えられている。一方で、いくつかの先行研究では、母親の養育態度の影響以外の要因が大きいことも指摘されている（例えば、森下・前田，2015；坂地・吉澤，2019）。守屋・山崎・土田（2008）は、自己制御の発達には、自分自身の感情理解といった働きかけが必要であると示唆している。また、原田・土屋（2019）は、他者の感情を正しく読み取ることが自己抑制や自己主張には必要だと述べている。このことから青年期の社会的自己制御の発達には、自己や他者の感情理解の力（本研究ではメンタライゼーションと仮定する）が影響を与えていると考えられる。菊池（2012）は、メンタライゼーションを欠くと自分自身の感情調節や対人関係が困難になると述べている。従来の先行研究では、青年期の社会的自己制御の発達において、このようなメンタライゼーションを踏まえた発達という側面に注目してない。そこで本研究では、青年期の社会的自己制御の発達において、児童期の母親の養育態度による影響だけではなく、メンタライゼーションによる影響も加味した仮説モデルを探索的に検討することを目的とする。

【方法】18～27歳までの大学生・大学院生・社会人に対して Web 上で無記名式質問紙調査を実施し、計 112 名（男性 41 名，女性 71 名；平均年齢=20.88， $SD=1.79$ ）を分析対象とした。①年齢・性別②母親の養育態度尺度（姜・酒井，2006）③メンタライゼーション尺度（山口，2016）④社会的自己制御尺度（原田・吉澤・吉田，2008）を用いた。

【結果と考察】仮説モデルを検討するために共分散構造分析を行った結果、十分な適合度指標が得られた ($GFI=.986$, $AGFI=.955$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$)。青年期の社会的自己制御の発達には、児童期の母親の養育態度だけではなく、メンタライゼーションが影響していることが明らかになった。原田他（2008）は、青年期の社会的自己制御について、幼児期や児童期の他律的な自己制御段階とは異なり、社会が要請する規範が内在化された上で自己を制御する自律的な自己制御段階であると述べている。そのような青年期の自己制御機能を踏まえると、青年期では、これまでの社会的自己制御モデルよりも、本研究で得られたメンタライゼーションを媒介したモデルのように、内的要因を含んだ発達モデルの方が、社会的自己制御の発達を検討する上で妥当なのではないかと考えられる。つまり、本研究で得られたモデルは、児童期の母親の養育態度と青年期の社会的自己制御の関連において、自己や他者に対するメンタライジングの力が機能していることを表していると推察される。また、本研究では、メンタライゼーションを行う対象によって社会的自己制御に与える影響が異なることが示唆された。「対自的メンタライゼーション」は社会的自己制御の「自己主張」的側面に正の影響を与え、「対他的メンタライゼーション」は社会的自己制御の「自己抑制」的側面に正の影響を与えていた。自分の感情や思考を理解するといった自分の状態に対する意識が高いと、集団の中において自分の主張すべき意見について理解しており、適切な自己主張に繋がるのではないかと考えられる。他者に対するメンタライゼーションが自己抑制を促進することには、他者から見た自分という他者視点に立って自分の行動を客観的に捉えることが関係していると推察される。以上のことから、これまでの先行研究で報告されている青年期の社会的自己制御モデルの過程においても、自己や他者に対するメンタライゼーションといった内在化された力の存在を検討していく必要があると考えられる。